

新ひだか町の農業2022（令和4年）

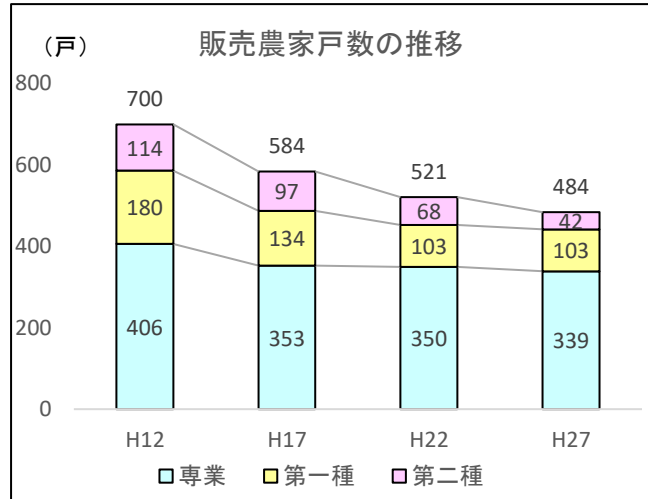
1 農家戸数等

農家戸数、農家人口は共に減少傾向にあり、平成12年の700戸の販売農家戸数は平成27年では484戸となり、約30%が減少しています。特に第一種と第二種の兼業農家の減少は専業農家よりも急速に進行しており、平成12年では42%占めていた兼業農家率は、平成27年では30%までに減少しています。

農家人口は、平成12年の2,823人が平成27年には1,557人となり、約45%が減少しています。

農業就業人口（自営農業を主として従事した世帯員数）は、平成12年の1,772人が平成27年には1,090人となり、約40%が減少しています。

また、そのうち65歳以上の割合が40%を占め、就業者の高齢化が進んでいることがいえます。



資料：農林業センサス

農家戸数及び農業就業人口等の推移

区分	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	27年/12年
販売農家戸数(戸)	700	584	521	484	69.1%
農家人口(人)	2,823	2,243	1,837	1,557	55.2%
農業就業人口(人)	1,772	1,405	1,254	1,090	61.5%
うち65歳以上割合	36.5%	34.9%	38.7%	40.3%	-

資料：農林業センサス

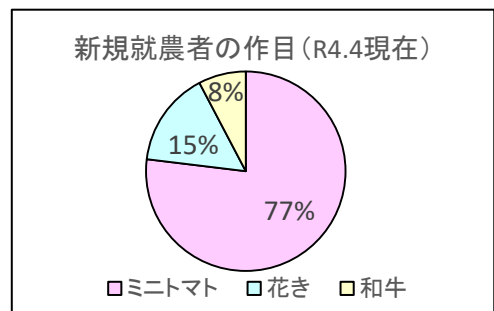
新規就農者の状況は、町の振興作目を「ミニトマト・花き・和牛」としていることから、この作目での就農者となっています。

本格的に新規就農者の受入体制を構築した平成25年から令和4年までの就農者は39名となり、そのうち新規参入者は34名、親元就農は5名となっています。作目別では、ミニトマト30名、花き6名、和牛3名となっており、77%がミニトマトの就農者となっています。

新規就農者数の推移

区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	計
新規参入	1	1	3	5	7	5	4	2	3	3	34
親元就農	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	5
計	1	1	3	5	9	8	4	2	3	3	39

資料：農政課調



資料：農政課調

2 耕地面積

令和2年の耕地面積は、9,160ha（田14.6%、畑85.4%）で、15年前の平成17年と比較して約3%の減少となっています。内訳としては、畑が100.8%と増加しているのに対し、田は86.5%で、田の減少が進行している状況にあります。

区分	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	2年/17年
耕地面積	9,310	9,260	9,180	9,160	98.4%
田	1,550	1,540	1,460	1,340	86.5%
畑	7,760	7,720	7,720	7,820	100.8%

資料：耕地及び作付面積調査

3 経営規模

平成27年の1戸あたりの平均経営耕地面積は、約19haで、全道平均の約30haを大幅に下回っています。

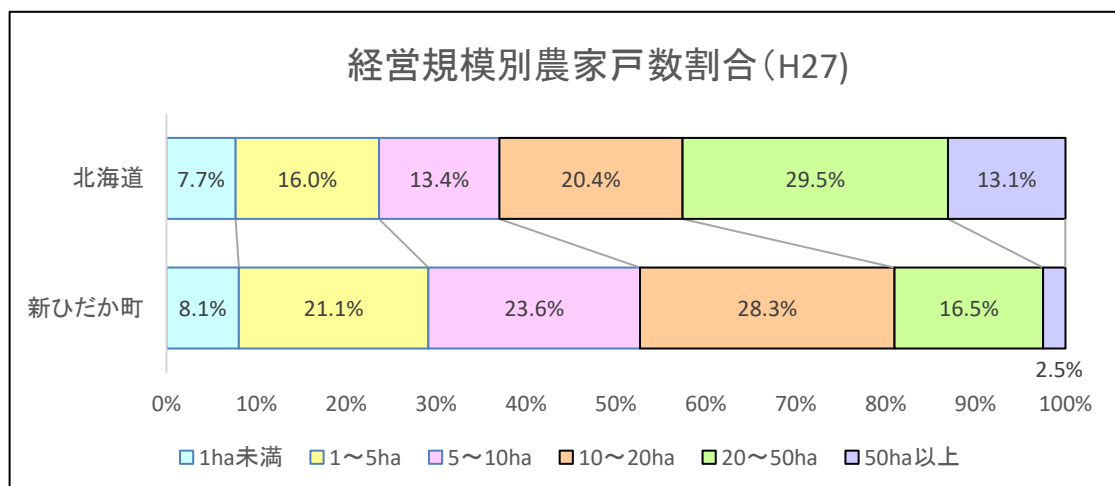
特に、10ha～20haの階層が最も多く、全戸数の28.3%を占めていますが、20ha以下の階層でみると81.1%と北海道の57.5%と比較すると中小規模経営の農家が多いことがいえます。

また、農家戸数が減少している一方で、1戸当たりの経営面積が増えており、離農等に伴う軽種馬農家や肉用牛農家への農地の集積が進んでいる状況にあります。

経営規模別農家戸数の割合 (H27販売農家) (戸)

	1ha未満	1～5ha	5～10ha	10～20ha	20～50ha	50ha以上	計
新ひだか町	39	102	114	137	80	12	484
北海道	2,930	6,075	5,097	7,760	11,253	4,971	38,086

資料：2015農林業センサス



資料：2015農林業センサス

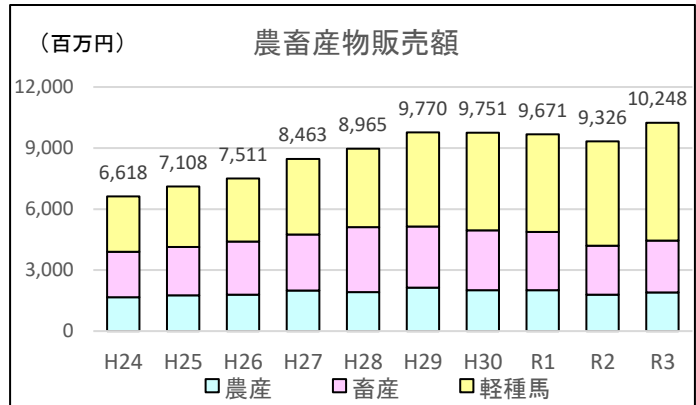
4 農業生産

農畜産物の販売額は、令和2年までは平成29年の9,770百万円をピークに減少傾向にありましたが、令和3年は10,248百万円でこの10年間では最も高い販売額となり、その要因は軽種馬の販売額が大きく伸びたことが挙げられます。

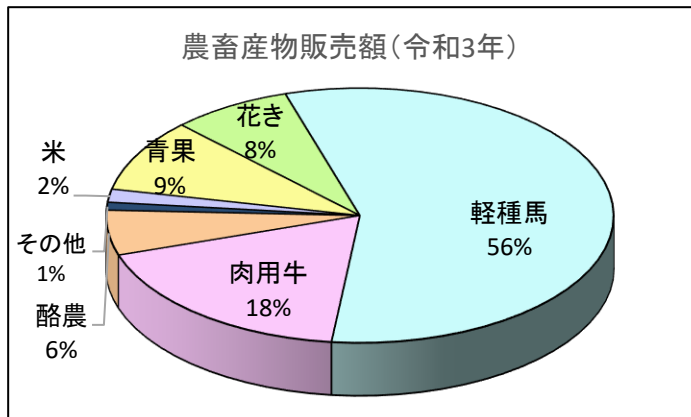
内訳としては、軽種馬がその56%を占め、次に肉用牛（肥育・育成）が18%、酪農が6%となっており、畜産が全体の80%を占めています。農産はミニトマトを主力とする青果と花きが主な農産物となっており、17%を占めています。

令和3年の主な農畜産物の生産・販売状況は、新型コロナウイルスが収束しない中ではありましたが、全般的にコロナ禍前の販売市況までの回復が見られました。

特に軽種馬については、中央競馬、地方競馬の開催継続やインターネットでの馬券発売の好調により、ホッカイドウ競馬の発売額や北海道市場での軽種馬販売額も令和2年の記録を更新する過去最高の成績となりました。



資料:JA調(みついし・しずない)



資料:JA調(みついし・しずない)

主な農畜産物の生産・販売状況

区分	令和3年		令和2年		増減	
	生産量	販売額	生産量	販売額	生産量	販売額
	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)
米	14,726 俵	170,240	12,214 俵	169,795	2,512 俵	445
ミニトマト	1,277 t	846,661	1,245 t	832,536	32 t	14,125
トマト	94,272 kg	29,290	107,593 kg	34,612	△ 13,321 kg	△ 5,322
胡瓜	42,110 kg	11,878	61,507 kg	21,378	△ 19,397 kg	△ 9,500
ほうれん草	72,168 kg	35,954	63,664 kg	37,708	8,504 kg	△ 1,754
花き	6,928 千本	785,720	6,551 千本	659,981	377 千本	125,739
アスパラ	13,974 kg	19,588	15,734 kg	21,740	△ 1,760 kg	△ 2,152
農産計	-	1,899,331	-	1,777,750	-	121,581
生乳	6,191 t	584,030	6,387 t	620,547	△ 196 t	△ 36,517
肉用牛(育成)	1,630 頭	1,210,674	1,644 頭	1,083,087	△ 14 頭	127,587
肉用牛(肥育)	495 頭	653,015	504 頭	600,376	△ 9 頭	52,639
畜産計	-	2,447,719	-	2,304,010	-	143,709
農畜産合計	-	4,347,050	-	4,081,760	-	265,290
軽種馬	640 頭	5,793,780	605 頭	5,118,360	35 頭	675,420
総合計	-	10,140,830	-	9,200,120	-	940,710

資料:JA調(みついし・しずない)

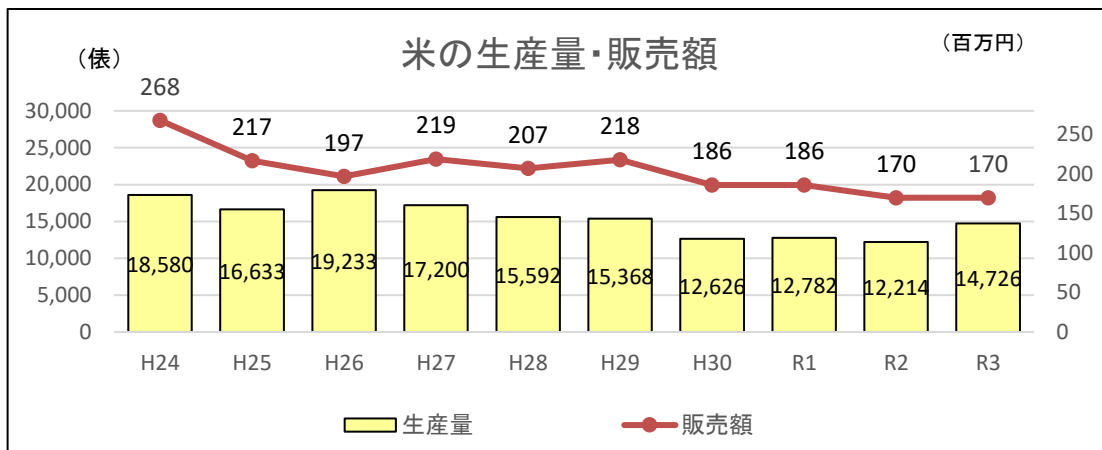
5 農畜産物の生産状況

(1) 水稻

水稻作付面積は年々減少し、令和3年の水田面積2,448haのうち、水稻作付面積は223haで転作率は9割超となり、これに伴い生産量、販売額も減少傾向にあります。

令和3年の作況指数は、北海道が108、日高管内は109の「良」となる豊作に恵まれ、また、出荷数量の1等米比率は、97.8%と全道平均（88.4%）、全国平均（83.1%）を上回る水準となりましたが、過剰在庫に加え昨年続く豊作により米価が下落となりました。

また、売れる米づくりを進めるため、特別栽培米の「万馬券」（JAしずない）や低タンパク米「トキノミノル」（JAみついし）として馬産地にちなんだ独自ブランドでの販売に取り組んでいます。

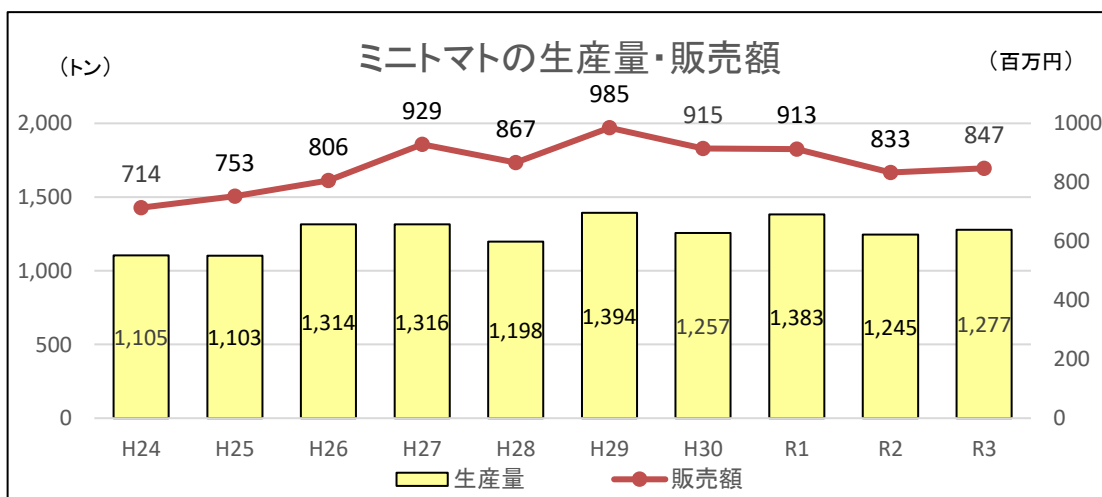


資料:JA調(みついし・しずない)

(2) ミニトマト

ミニトマトの栽培戸数、作付面積は、新規就農者の増加等により、生産量、販売額も増加傾向にあります。促成、半促成、抑制栽培の栽培体制を確立し、5月から11月までの安定した長期出荷体制で、キャロル10を統一品種とした「太陽の瞳」のブランド銘柄で道内外市場に出荷しています。

単価も近年は600円/kg以上と高水準を維持しており、令和3年は8月の高温障害による生産量の減少に加え、前年よりも低単価となりましたが、作付面積の増により生産量、販売額共に前年を上回り、前年対比で生産量は2.6%、販売額は1.7%の増加となりました。



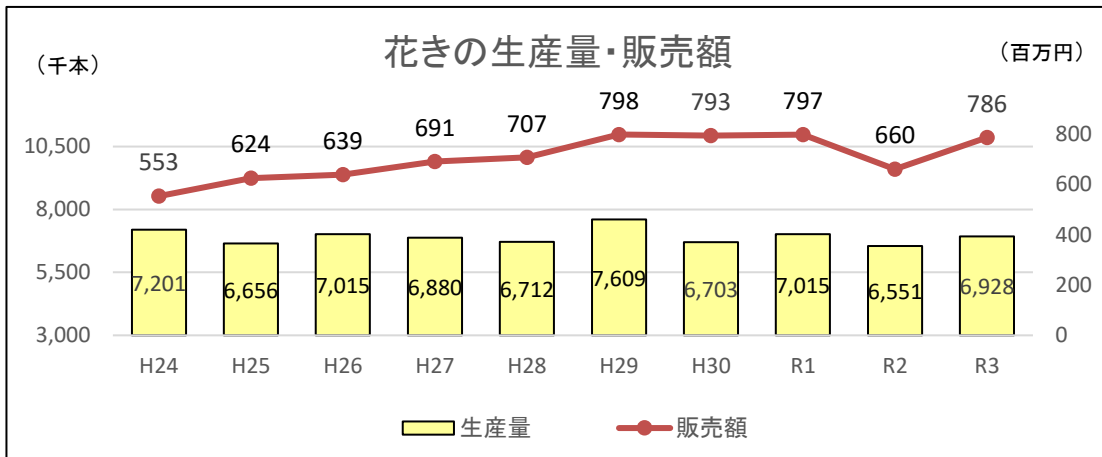
資料:JALしずない調

(3) 花き

花きは、三石地区を中心に静内地区、浦河町の栽培農家による広域出荷体制で定時定量出荷を確立し、関東・関西を中心とする道内外に「みついし花だより」の統一ブランド銘柄で出荷しています。

生産する花きは、デルフィニウムをはじめ、スターチス、ダリアやマトリカリアなどの施設花が主体となっており、全販売額の74%はデルフィニウムが占め、全国トップクラスの産地となっています。近年は、新規就農者も参入しており栽培面積も増えていますが、生産量は横ばいとなっているものの、販売額は増加傾向にあります。

令和3年は、依然、新型コロナウイルスの影響により冠婚葬祭や各種イベントの自粛による花需要が大きく落ち込む中、家庭内消費が増大し単価も103.1円/本と前年対比で13%増となり、コロナ禍前の価格を取り戻しました。販売額も786百万円と前年対比で20%の増となりました。

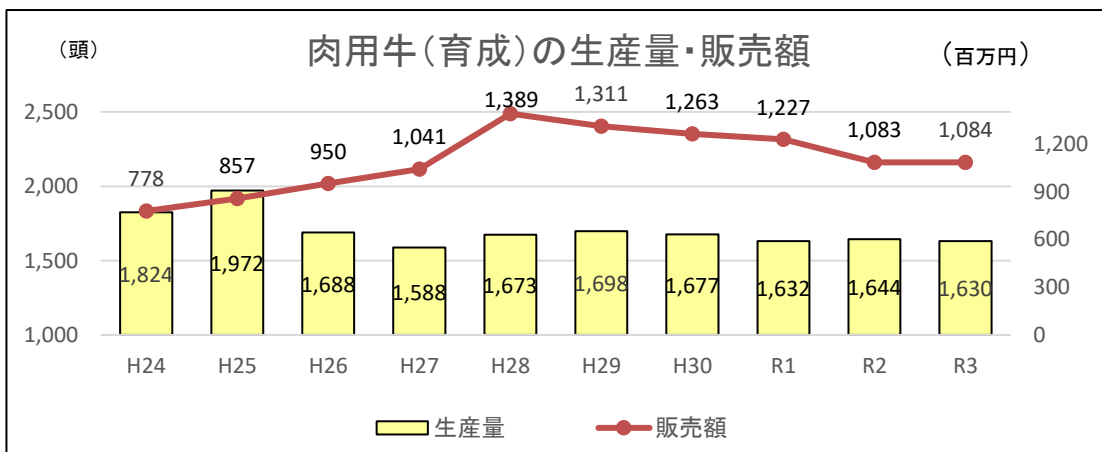


資料: JAみついし調

(4) 肉用牛 (育成)

子牛市場での1頭当たりの平均販売金額は高値水準にありますが、平成28年をピークに減少しており、これに伴い販売額も減少傾向にあります。出荷頭数はここ数年横ばいとなっています。

令和3年は、新型コロナウイルスの影響による外食産業での和牛消費が回復しない中ではありましたが、和牛牛肉の輸出拡大や堅調な家庭消費に支えられコロナ禍前の価格を取り戻しました。出荷頭数、販売額は前年とほぼ変わりはありませんが、1頭当たりの販売単価は、743千円と前年の659千円と比較し13%の増となりました。

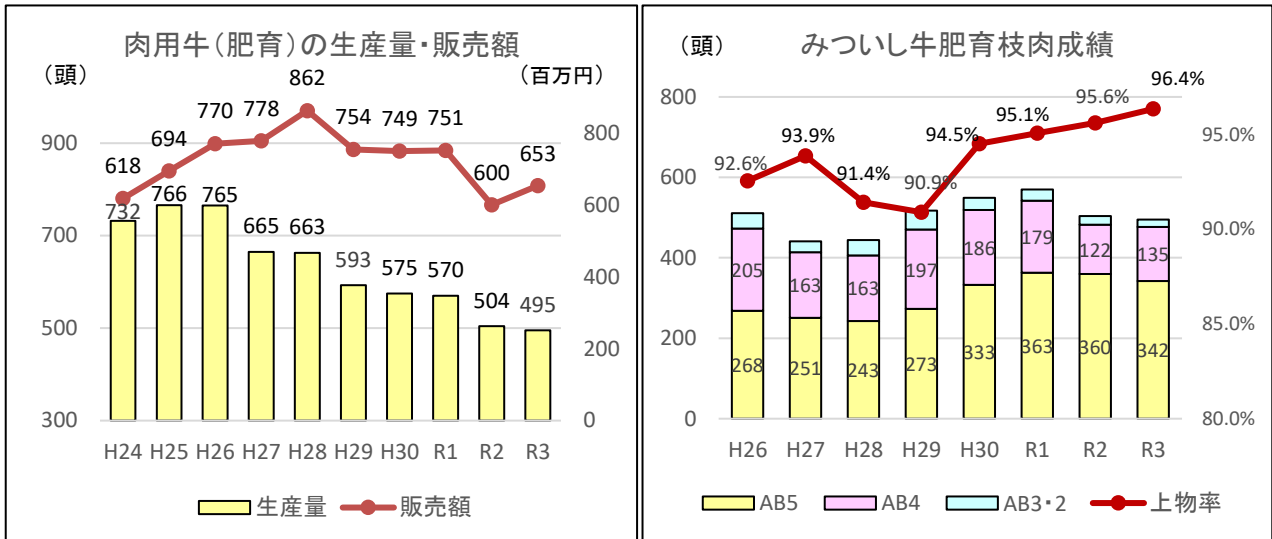


資料: JA調(みついし・しずない)

(5) 肉用牛（肥育）

肥育牛については、町内外農家による広域出荷体制を組み、一貫肥育により「みついし牛」のブランド銘柄として東京食肉市場へ出荷しています。枝肉成績の上物率はここ数年は、95%超を維持し、令和3年は96.4%と過去最高となる水準を達しました。

和牛枝肉価格は、平成23年頃から外国人観光客の増加の連動に伴い上昇し、平成28年の862百万円をピークにその後は下降しています。令和3年は依然新型コロナウイルスの影響により外食産業需要などは回復しない中ではありましたが、輸出拡大や家庭消費の拡大により、販売市況は回復基調となりました。生産頭数は495頭で前年対比2%の減少でありましたが、販売額は前年対比で9%増の653百万円となりました。



資料: JAみついし調

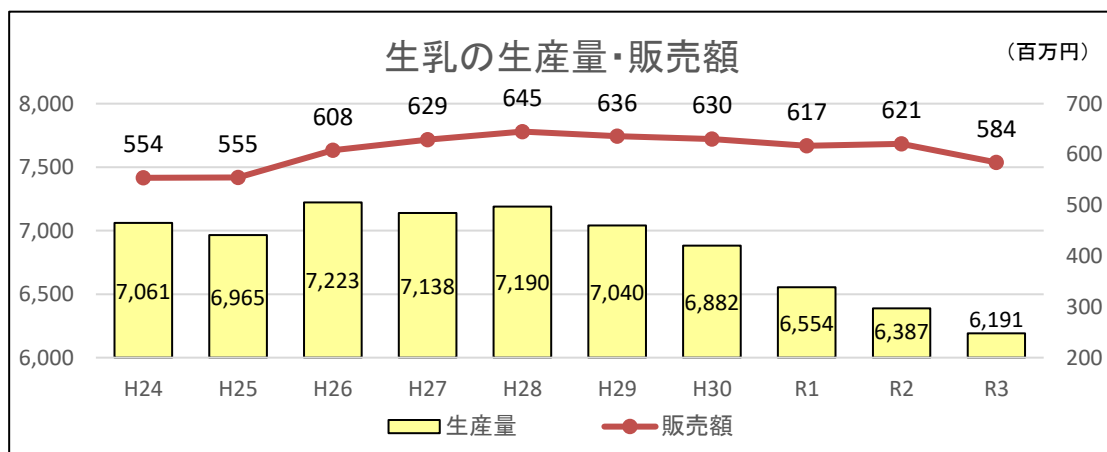
資料: JAみついし調

(6) 酪農

生産量は平成26年の7,223トン进行ピーク減少していますが、これまでの生乳価格の据置と近年の上昇により販売額はほぼ横ばいで推移しています。令和3年は7月、8月の猛暑が続いたことで乳量が減少する影響もあり、生産量が6,191トンで前年対比3%の減、販売額は584百万円で前年対比6%の減となっています。

乳質については、酪農家の自助努力により乳質改善に取り組んでおり、生菌・体細胞比率では日高管内平均を上回る水準となっています。

また、酪農ヘルパーの利用促進により過重労働の軽減に努めています。



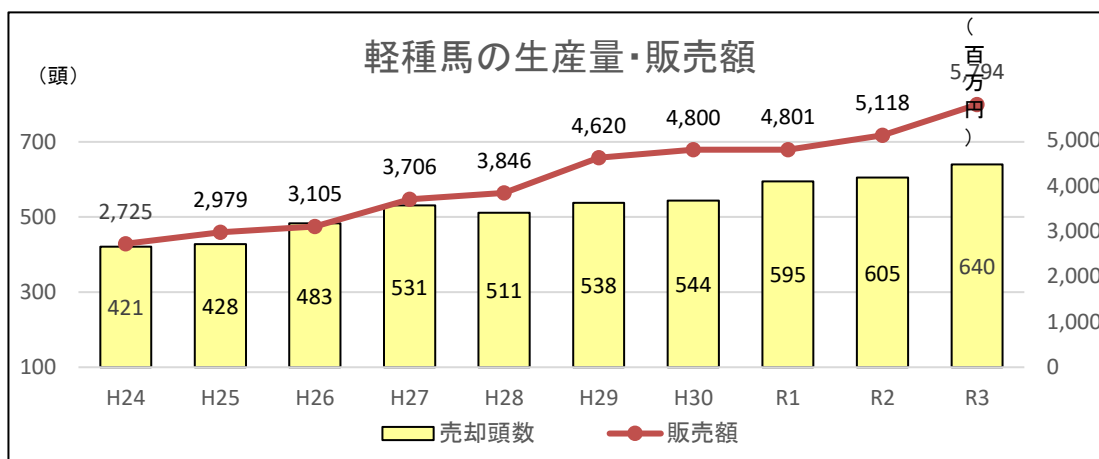
資料: JA調(みついし・しずない)

(7) 軽種馬

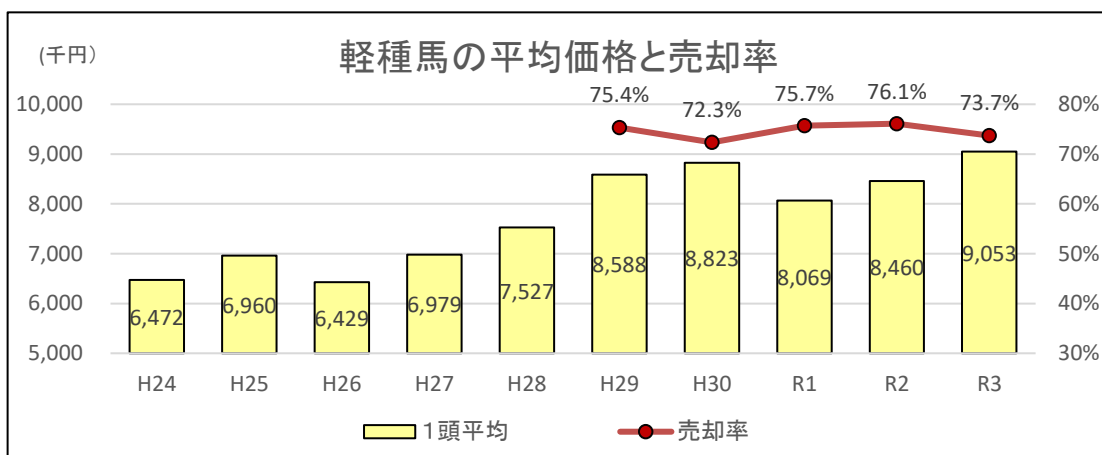
軽種馬においては、依然収束しない新型コロナウイルスの影響も懸念されましたが、令和3年度は北海道市場の全セールが開催され、販売頭数は前年6%増の640頭、販売額は前年13%増の5,794百万円となり、昨年の過去最高販売額を更新しました。

また、売却率は73.7%と前年より2.4ポイントの減となりましたが、1頭当たりの販売平均価格が上昇傾向にあり、令和3年では前年対比で7%増の9,053千円となりました。

さらに、中央競馬、地方競馬の馬券発売も好調で、ホッカイドウ競馬にあっては、発売額が約523億円で11年連続プラスで、令和2年の年間発売金額レコードを更新する結果となりました。



資料: JA調(みついし・しずない)



資料: JA調(みついし・しずない)